明治の女子

明治四十一年九月十五日發行
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可

明治の女子
第五巻第八
七草號

目次

本欄

◉此の身體を如何にすべきか……井深梶之助
◎信者たる道……エー、シー、マクドナルド
◎罪過の翫賞者を警む……川副櫻喬
◉風俗改良に就て……宮川壽美子
◎ヘンリック、イブセンの詩……秋田雨雀
◎夜の深秘……木山一夢
◉宗教の撰擇……植村正久

彙報欄

○秋色動く○雜誌の革新○女子青年會第二寄宿舍を觀る○工女傳道に就ての所感○ツキルミナ女學校青年會報告○名古屋女子青年會遊戲講習會記事○編輯餘錄

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治の女子

「明治の女子」は日本基督教女子青年會中央委員が發行する機關雜誌也。
「明治の女子」は一年分郵税共金五拾錢一部郵税共金五錢とす。
日本基督教女子青年會は青年女子の衛生、社交、智識、靈性上の發達を計るための團體也。
日本基督教女子青年會中央委員左の如し。

委員長 エム、エ、ホイットマン
副委員長 岡見恵子
記録書記 エ、ツー、ルイス
會計 フィシャー
萬國基督教女子青年會同盟委員 河井道子
萬國學生基督教同盟會委員 宮川すみ子

東京在住委員
津田梅子　渡部瀧子
エ、ピー、ウエスト　井上友子
平野濱子　鈴木歌子
中島小春　井深花子

地方在住委員
大坂 ケー、ツリスツラム　京都 松田道子
京都 ツ、エス、フエルプス　仙臺 エル、ザフルー
名古屋 イ、エム、ソーパル　廣島 エヌ、ジー、ゲインス

日本女子基督教青年會幹事 エー、シー、マクドナルド
同副幹事 エス、シー、フキッシャー

明治四十一年九月十三日印刷
明治四十一年九月十五日發行

發行兼編輯人 東京市麹町區土手三番町十五番地 エー、シー、マクドナルド
印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎
印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍

日本基督教女子青年會の事に付き御尋れの節は東京麹町區土手三番町十五番地同會事務所宛にし御尋相成度候

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

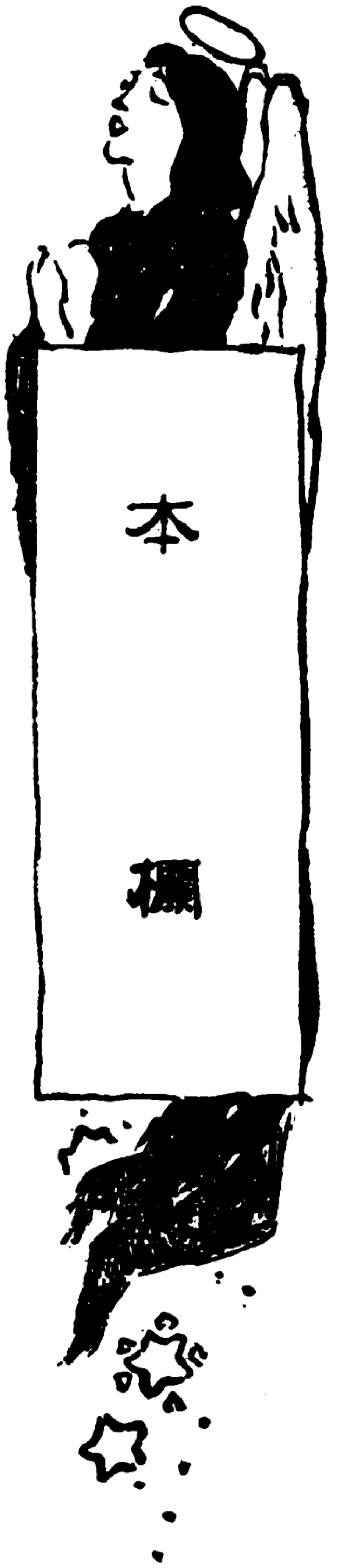
秋色動く!!!

庭前の梧桐なほ緑りなるも、世はいつしか秋の色動きそめたりと覺し。野路には刈萱桔梗女郎花なんど秋の七草とり〴〵に優に美しき風姿をみせたるゆかしさよ。

涼風軒端に薫して玉露樹葉にきらめく。氣は澄み心改まり四圍の風物亦自ら一變して靜思修學の好機を與ふ。燈火正に親しむべく郊野の淸以て探るべし。嗚呼淸澄掬すべく閑寂味ふべきは新涼九月の空なるかな。

眼を上れば天地自然の美は歡樂の中なほ壯嚴なる御聲を以て人子の胸深く宇宙無極の眞理を囁く。澄み渡る一痕の明月に胸間一味の淸爽を呼び、草間にすだく蟲の音に人生既往の妙を想ふも、亦一段の興あらむ。記者は此好時、秋に因める「七草號」一卷を讀者諸子の机邊に呈するの光榮を喜ぶ。あゝ蟲聲中に湧き、月光中天にかゝる。「秋の七草」希くは人生無極の詩に觸れよ!!

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA



此の身體を如何にすべきか

明治學院總理神學博士　井深梶之助

神其の像の如くに人を創造たまへり…………(創世記一〇二七)
爾曹は神の殿にして神の靈なんぢらの中に在すことを知らざるか…………(哥林多前書三〇一六)

私共が嘗て神學を修めました時分第一に讀ませられたのは孝經といふ本でした。此中には誰も能く知つている「身體髮膚皆是受父母、敢不毀傷孝之始也」といふ一句がのつて居る。是は我等の身體は皆父母より享け得たるものである。故に父母の賜たる此の身を痛め傷くるのは親に對して大なる不幸、大なる罪であると謂ふのである。近頃我國の青年男女にしてかゝる愼重な態度を採つて居るものが果してどの位居るだらうか。

一體我等の身體は如何なるものであらう。竊かに考ふるに我國では近時切りに自己一身を持て餘し厄介視して居るやうに思ふ。其の結果は無謀にも自身を海に投じ毒を仰ぎ刄に伏し、或は華嚴に淺間の山頂に汲々として死場所を求めて居る。此等の事實は新聞の一二枚も廣げて見ると直ぐ分解ることである。元より是には色々な源因理由の潛在して居るに違いない。が要するに現代人士が身體に對する健全な思想を缺いて居る事實は少くとも其の主要な源因ではあるまいか。今日青年男女の間には不健全な思想が滔々として濁波を漲らして居る

身體に關する思想の如きも其の一なのである。あゝ我等は此の身體なるものを抑如何にすべきであらうか。

試に東西の歴史を讀てみると古より今に至る迄身體に關して少くとも二つの極端な考が流れて來たやうに思ふ。即ち其の一は古代より東西兩洋を通じて唱導せられた思想で太古身體を以て唯一意不淨不純のものと考ふることである。種々の情慾は全然之れ肉の聲である。身體より發するものである。故に身體は飽くまでも制し抑へて行かなければならぬ………といふのである。即ち自己の肉體を以て自己の敵と見、自己を害ふものと觀するのである。ある西哲の一人は世にある種々樣々な不義的分子は要するに人が肉體を抱いて居る故である元來人は肉の所有者に非ずして純にして純なる靈の固まりである。然して哲人——知あるもの——は一切此の汚れを掃つて純なる靈に立ち返るものと考へて居たのである。其の形式に於てこそ多少の相違はあるが佛敎に於ても正しく左樣である。一體人間の身體は四元素——地水火風——を以て成り立て居る。四大は皆是空である。迷の元は此の理を知らず飽くまで身體といふ形骸にかぢり付いている——一種の迷想——よりして起つてくるのである。然らば迷とは何であるか。又何處より起つてくるのであらうか。此等はすべて慾である。故に迷を去るには必ず先づ此の慾情を根本的に打破しなければならぬ。かく説明するのが佛敎の羈絆を所謂肉體觀である。此のほだしを脱却するのが即ち佛の道である。死者を佛といふのは取りも直さず此の肉の解脱するのである。丁度四人が固い苦しい縛の繩から解き放されるやうに肉の慾から解放せられたるもの、是が所謂佛敎の佛である。人慾は飽く迄も之を制して行かねばならぬ。全然此の束縛より脫し得たるもの是が眞の佛である佛であると謂ふのである。

敎會史を讀で見ると基督敎にも稍是に類した思想の行はれた時代があつた。紀元三四世紀の頃はローマの敎育廢れて男女の風儀道德などの非常に混亂した時代であつた。此に於て世と交ることがむづかしくなつて眞

に自己を清くしようといふのには如何しても世と離れ社會を捨てなければならぬといふことになつた。そこで埃及のアントニーは沙漠に入つて人世と絶ち、ミリアムは樹上に數丈數十尺の圓柱を作つて日夜風雨に曝されて其の日を送るといふ奇話も生じてきたのである。中世に至ても此の思想はなか〳〵衰へさうもない。或時は結婚を禁じ財産の所有さへも拘束した時代があつたさうである。

此の如く邪念邪惡を絶ち一切情慾を節して自己の清淨を圖つたのは大に喜ぶべき現象である。然し竊に思ふに彼等は基督教其物を誤解しては居なかつたゞらうか否彼等は皆「神其の像の如くに人を造り給へり」といふ眞理を忘れて居たやうに思へる。

一體人間が神の像であるといふことは如何な意味であるか。元より神は靈なるもので形のないものであるとしても唯靈のみと見ることは出來ぬ。矢張り肉をも具し給へるものと觀ぜなければならぬ。斯く觀じて來ると先きに述べた佛教やある西哲の肉體觀のやうに此の身體を以て唯罪惡の根元と考へるのは大なる誤であると云はねばならぬ。

今一ツの説は是とは正反對に自己の身體を以て無上唯一のものと考ふるのである。即ち前者が自身を敵とするに反して是は自身を神として尊ぶ。其の結果人間は各自の慾求を滿足せしむるを以て人生最大の目的と思考し唯一意快樂を追及しやうと云ふ傾向を帶び來るのである。我等は必ず死すべき者である。然らば生存中は出來得る限り樂しくする方がいゝぢやないか。我等の生命は明日をも俟たぬものである。天地には未來もなければ過去もない。只現在さへ樂しくすれば宜いのだ。斯の如く人生の目的を快樂にありとみるのは倫理學上の所謂快樂主義で後に至て起り來たミルやベンタムの功利派の魁をなしたのである。それは倫理の問題として自ら別事であるが快樂といふと大抵の人は先づ肉體に附隨する慾求を滿たさんとするのは已むを得ないことである

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

殊に近世に於ては本能主義 Instinctualism なるものが獨逸一派の學者に依て唱導せられて、人間は性來の本能的慾求を滿たすのが人生最大の幸福て又目的であると云ふ。近時の所謂自然主義（通俗的意義に於ける）なるものは即ち之である。つまり人は何でも欲しいと思ふことを成し遂げるのが自然で一切道德的批判を受けないといふのであらう。蓋し人間本能の慾求を道德的に抑え付けるのは不自然であり又一種の壓制である。故に人は自然的本能的の生活をする。かく觀るのが今日の所謂自然主義なるものであらう。實際此の如き生活を試みない迄も人生は斯くあるべきものだなど丶考へて居るものが少からぬやうに思ふ」此等は勿論基督敎の主旨より離れ遠かつたもので取るに足らぬ愚說であるが、以上述べた二ッの極端な主義は事實として吾人の四周に橫はつて居ることを忘れてはならぬ。然らば吾人は此の兩者に對して如何なる態度をとるべきか。世を渡り世路の難を切り開ひて進み行くには抑如何なる手段をとるべきであらうか。是は吾等が眞面目に研究すべき一大疑問である。

此の問題を解決する爲に私は始に引用した聖書中の二句を改めて紹介したいと思ふ。

爾曹は神の殿にして神の靈なんぢらの中に在すことを知らざるか…………（哥、前、三〇一六）

神其の像の如くに人を造り玉へり…………（創世記一〇二七）

此の如く我等男女は共に神の像に倣へて造られて居る。けれども神の像といふものは主として靈性的の意味てあるが、人間は唯に肉のみに限られて居ないやうに矢張り又靈のみといふことは出來ぬ。靈肉相聚つて始めて此に人といふ形を造り上げるのである。

然らば兄弟よ我れ神の諸の慈愛をもて爾曹に勸む其の身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神に捧よ是當然の祭なり…………（羅馬書一二〇一）

即ち其の心といはずして其の身といふ。此の身を神の意に適ふ聖き祭物となすことが必要である。此の一句よりして吾等が第一に學ぶべきことは、人は神の像に依て作られたものであるが故に吾等は皆貴き神の形である之と同時に聖き神聖なものであるといふ感念である。然し今一段高い深い思想は先程コリンタ聖書の三節から引用した「吾等は神の宮殿である神の靈は吾等の中に在ます」といふ一種嚴かな信念である。言ひ換ふれば我等は神の宿り給ふ宮殿で神靈の家であるといふ確固不拔の自覺である。神は天地萬有の主宰であるといへば何だかから遠い遠方の方にかけ離れて在ますやうな聯想が起つてくる。成る程神は萬物の上にましますに相違ない。けれども亦神は吾等人心の叫び聲にも應じ給ふものである。パウロの言にも「神は吾等より去ること遠からず」とある。我父に求めよ。父は必ず憂の雲を掃ひ苦しみの幕を徹して慰めと喜びとを與へ給ふに違ひない。只身體のみならず現に神の在す以上神の靈は我等の中に宿り給ふものと信ずるのである。果して然らば吾等は此の身體を抑も如何にすべきであるか。

貝原益軒の書いた養生訓といふ本は誠に得易からぬ良書で先きに述べた佛家の說や、さる西哲の話よりもズツト優つて居る。のみならず彼等よりも遙に基敎の眞理に接近して居るものである。が惜いかな益軒は天地父母と謂て神を呼で居ない。各自の身體は天地の惠み父母のものであつて決して我れ私の所有すべきものでないと云つて居る。之は慥に卓見である。パウロの思想と能く一致し共通して居る點である。が此等に就て我等が記臆に止めて置かねばならぬことは各自の身體は自己のものにして又自己一身のものに非ざることとである。換言すれば**各自の身體は神の惠みに依て與へられ。神の像に倣て造られたものであるといふ一事である**。要するに吾等は各自の身體に關してモ少し神聖な考を有つことが必要である。何人に係らず身體を大切にすべきといふことは自然の勢であるが基督敎の立場からみると唯我一個の利益でなく神に對する大なる義務であるといふ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

考が必要であると思ふ。即ち儒者の語を借りていへば父母である天地である。我を造り我を育み給ひし造物者に對して當然各自の身體を大切にする義務があるのである。

諺に「健全なる身體に健全なる精神（Sound Health in Sound body）といふことがある。吾人の身體を以て神の靈の宿り給ふ宮殿であると信ずる以上は之を大切にし神聖視するのは當然至當の義務であらう。若しも神の宮殿たる各自の身體を汚すやうなことがあつたなら其れこそ大なる罪である神の罪人である。苟も我身を邪念邪惡の爲に汚すなどいふことは人として許すべからざる罪惡である。故に聖書にも「爾曹其の身を神の意に適ふ聖き活る祭物として神に捧よ」とある。今一つ注意すべきことは人は任意に身を殺し得るの權能ありや否やの問題である。是は一應お話をして置く必要があると思ふが今日程我が國で自殺者の多い時代はあるまい。毎朝の新聞を取て見ると三四の自殺者は屹度載つて居る。一體之は如何いふ理由であらうか。

近頃人口が漸次と殖えて生存競爭の烈しくなりかゝつた爲に生活の苦を感ずることは著しい事實である。其の反動でもあらうか近頃は又慈善などいふ聲が方々に起つてきた。けれども私は餘り感心せない。古來日本の美風であつた親族近所近邊の者が相扶け相救うといふ道義心が次第に衰へて居るではないか。壁一重隣りはもう利害相關せずといふ有樣であるが之も生存競爭の烈しい爲に他人のことを考へて居る隙がないと云へばそれ迄のことだが、兎に角此等の結果として生活に窮した揚句は自殺者を増加せしむるといふ狀態である。けれども現今青年男女の自殺者を見るに其の源因の多くは不品行の爲である。田舍から始めて東京にやつてきて未だ知らぬ種々の誘惑に襲はれて遂に墮落の淵に沈淪した結果は死を決するやうになる。或は不義の約束などをして現世に於ては種々の障害があるから未來で………などいふ一種の迷信に驅られて死地に就くものも少くはあるまい。藤村某のやうに人生不可解などいふことは少くなつたやうに思ふが、要するに今時程青年男女が死を急

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぐ時節はあるまい。否近頃程生命の相場の下落した時代は未だ嘗て見聞したことのない現象である。此等は元より種々の理由もあらうが社會が自殺に對する制裁を缺いて居ることは主要な一因であらうと思ふ。今時日本の社會には强固な制裁力を缺いて居る。よしあるにしても極めて薄弱である。之は由々敷き國家社會上の大問題であると思ふ。私は一個のクリスチャンとして大に此等に反對せねばならぬ。勿論或る特殊の場合に限つて例外があるのかも知らぬが、實際私は自殺を以て人間の最も大なる罪惡として否認するのである。何故か、吾人の身體は神のものである。我がものにして同時に亦我か所有以上のものである。吾等の一身は神より直接に依托を受けた大事なものである。臣下たる吾等が一度君王より寶玉を托せられた者を無斷に壞すなどゝは以ての外の罪業ではあるまいか。神より返せと求められた場合にこそ始めて此の世を辭すべきであらう。

第二、吾等が生きてるのは全體何の爲であるか。快樂の爲か生命の爲か。親の爲か。私は基督敎徒として神の國の爲と公言するのである。「生くるも死ぬるも我が益なり」といふ思想を味つて貰ひたい。我國古代の武士は君の馬前に死ぬるを以て最大の榮譽とした。彼等は自己の身體を以て君のもの殿のものであると自信したのである。故に平時は飽く迄も自重して苟も犬死するやうなことはしない。大事の場合に臨て花々しく一身を君王に献ぐる。之が日本固有の美しい武士道ではないか。あゝ苦しい……といつては華嚴の瀑壺に身を投げる。之が忠義の人といへるだらうか。眞に武士として責任を全うしたものといへるだらうか。基督敎徒の神に對する關係は丁度是てある。十字架の爲に戰ひ神の榮の爲に一命を捧ぐる。是が眞のクリスチャンである。眞の勇士てある。苦しみに會ひ悲しみに打たれて淺間に行き海に一身を投ずるが如きは全然神を知らぬものである神の救に洩れたものである。苦しみと戰ひ悲しみと競ふ。又人生の一大快事ではないか。

皆様は決してかゝる忠告をうける必要もあるまいが、然し人間といふものは不可解のもので行先き如何様に

變化して行くものかわからぬ。て無事の時に充分覺悟をして置くことが肝要である。憚らず申して置くが若し萬一にも神の御攝理に依りて絕體絕命の危地に陷るやうなことあらば是非此の一事を想ひ起して貰ひたい「神は其像の如くに人を創造たまへり」と。

（完）

◉次號卷頭豫告!!!

記者目下或る事業の爲め非常に忙殺せられ、爲めに本號校正日時迄に十月號卷頭の讀物を確定する能はざりしは深く遺憾とする所なり。然も不日期を見て粕屋村の寓居に德富蘆花氏を訪問する心算あれば氏の卓見名說は必ずや次號の卷頭を飾つて燦然たる光彩を放つべしと信ず。

此の他ミス、マクドナルド幹事の論說を始め、次號掲載の分にて略確定せるもの左の如し。

ブラウニングの「サウロ」を讀む……………………女子英學塾講師　河井道子
水の精………………………………………女子英學塾講師　辻村淸子
モシユー、アーノードの詩……………………………………秋田雨雀
體育に就て……………………………………女子大學講師　大森兵藏
ラオダミア夢物語（ヲーヅヲース）……………………………………一記者

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

信者たる道

エー、シー、マクドナルド

世には「基督敎のすぐれたる宗敎なることは我これを知る、されど如何にせばその信者となり得るや」と惑ふ人少からず。かゝる人のために信者たる道に就きて、我が思ふ節をひと言ふた言書きつらねんも、強ち無益のわざにはあらざるべし。

殊更とりいてゝいはんには餘りに事ふりにたれど、眞理は多く平凡のうちに寓するものなれば詮なし、基督に從ふ第一の道は、幼兒の如き單純且つ謙遜なる心を抱くにあり。基督敎の安心立命の境地に達せんには一たびは己を虛しうせざるべからず、己の學藝技能又は經驗のため、又己の先入の思想のために囚はれて越趄逡巡せば、いつまで經とも基督敎の門に入ること能はざるものぞ。されば古より捨身奉仕の必要を說く、寔に謂はれあり。使徒約翰は道に入る第一の秘訣を說きて曰く、「もし己の罪をいひ表はさば、神は信實なる公義きものなるが故に、必ず我儕の罪を赦し、すべての意義より我儕を潔むべし」と（約翰第一書第一章第九節）。而して虛心平氣に我等が神の目の前には到底罪人たることを免れざることを意識して之を懺悔するには、幼兒の如き單純にして且つ謙遜なる心を要するに非ずや。兎まれ角まれ我等は、この幼兒の如き心が、基督敎入門の第一步に於て要求せらるゝものなることを記憶せざるべからず。傲慢は人を惡魔の洞窟に導くものなり。

次に記憶すべきは、基督敎は心靈上の問題にして形式の問題に非ることなり。宗敎の先づ第一に訴ふるものは、人の精神なり。洗禮を受くるとか受けざるとか敎會に屬するとか屬せざるとかは、枝葉の問題にして根本問題は常に心靈に歸着せずんばあらざるなり。切言すれば基督敎は罪惡の生涯より純潔の生涯に移る變化を謂ふ。我等の本能及び快樂を脫出して、基督に從ひ神の意志をなすに至る徑路を謂ふ。抑も亦私利私慾のために行動する生涯を離れて、他人の利益に奉化す

るに至る進歩を謂ふ。又基督教は宗教に關する智識上の信條には關係なくして、人の意思に關係を有す、即ち基督教の信者たるものは、自ら進みて身を神前に捧げ、以て神獨り與へ給ふ力によりて、潔められ强められ信實なるものとせられざるべからず。而して之をなすには、先づ自己の罪惡と無價値とを認めて之を懺悔せざるべからず。然らば神は我等に新しき力と新しき生命とを與へたまはん。然り、神は我等の生命に、神の眞生命を注入したまひ、我等は神人相通の妙境に入るを得べけん。又基督教は、我等がその信者となる前に或程度の信仰を抱かざるべからざる事を要求せざるなり。「如何せば信者となり得るや」の疑問に對する答は極めて簡單なり、曰く、我等が只我等のなすべき事のみをなさば、基督は又其なし給ふべきことをなし給はん、基督は決して我等を失望させたまふまじ。我等の要するものは新生命なり、而して我等もし單純且つ謙遜なる心もて己を棄てゝ基督に在らば、我等はこの新生命を得て、自ら神の子と稱することを得るなり。固より神の子と稱すればとて、初めより成長せる完全なる者たることを期し得べからざれども　而かも神に於ける眞個の生命を得、且日々誘惑に打勝ちつゝ道に進む保障を得、又在天の父なる神と協和する生涯を得るなり。畢竟するに、基督教徒となるとは、基督に從ふことなり、基督を以て自己の師となし、標準となし、指導者となし、自己の生涯と計畫とを、基督の生涯と計畫とに適應せしむることなり。而して我等は、我等を愛し我等のために身を殺し、我等を罪惡の淵より救ひ出し、我等に眞個の生命を與へたまひし基督以外の人とは、決して我等自身を比較すべからざるなり。

日本は今や、人のわざを要せずして、神のわざを要す。我等自力にのみたよらば、衆生濟度の道に於て、なし得る所極めて少からん。然れども我等は我等に力を與ふる神によりて、大なることをなすを得べし。基督我等を召して宣はく、「凡べて勞れたる者、また重きを負へる者は我に來れ、我爾曹を息ません」と（馬太傳第十一章第二十八節）。我等先づ基督に來りて其言葉

の眞なることを驗するに非れば、他人を導きて基督に依る靈魂の慰安を味はしむることを得ざるなり。而して我等はパウロの如く自ら罪人の首長なることを意識しつゝ、幼兒の如きは單純且つ謙遜の心と、わが罪に悶ゆる誠實心とを以て基督に來らば、茲に始めて新生命の何たるかを解することを得ん。

諸姉若し羅馬書第七章を開きて、第十五節より第二十五節までを讀み、最後にパウロと共に『是われらの主イエス、キリストなるが故に神に感謝す』と叫ぶことを得たまはゞ、心靈の上に無量不可測の祝福を感じたまはん。

罪過の翫賞者を警む

櫻　喬　生

世に苦しきことの數々（かず〳〵）あれど、身甘露の境涯にありながら、湧然として我が胸深く襲ひ來る罪の意識ばかり苦しきものはあらじ。所詮は之れ自己現在の境涯たる幸福の美味を失はじとの自然的心靈の慾求に外ならずとするも、又造化翁（メーカー）の深き妙なる一大配劑たるを失はず。

竊に思ふ、人は斯（かく）の如く胸中吃然（きつねん）として湧き起る罪の意識を未解朦朧の中に葬り終（を）らむとする傾向はなきか、換言すれば單に罪過を「罪實其の物（ザンシダアンザィヒ）」として之を弄ばむとする傾向はなきか。是れ恐るべき一大臆說なりとするも又其の間一部の眞理なしと云ふべからず。

何人か好て罪過の意識より生じ來る苦痛を喜ぶものあらむ。否、人間として此の世に立てる間、幸福福利は常に其が胸裡の一隅に潜在せるものなるべし。果して然りとせば人は何が故に罪の意識をシシグ、イトセルフとして未解朦朧の中に沒入し去らむとするか。何が故に多數の人々は、罪過を根本的に懺悔（リペント）するの勞を厭ひて淺間しくも翫賞的態度をとらむとはするぞ。

謂ふ迄もなく罪の意識と幸福の感念とは常に相違反す。罪の意識を抑へつゝ幸福の山、福利の海を航せんは恰かも火を失したる氣球に駕して昇天の虛榮を夢む

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

る者、氣球は早晩駕者と共に奈落の奥底に失墜せずむばあらず。一度犯したる罪過の行爲——罪過の意識一—よりして、苦き苦痛の鞭達を受くるは正に之れ至當のこと、吾人が專心所念して不淨汚穢の分子を洗滌し折伏し、一向に心靈の清澄を圖らざるべからざる所以は正に此に在り焉。

誠に問はむ快樂とはそも何の謂ぞ。一言以て之を盡せば心の滿足也。靈の慰安也。心靈穩かならずむば、千百の高樓玲味あるも吾人に於て何かあらむ。常には美しと見し高根の月も、一天雲なきに我眼我心には密雲の朦々たることあらむ。八珍美味も心安からずば菜根を嚙むと何ぞ撰ばむ。貴むべきは一に是れ心情の平和靈能の滿足なるかな。

斯くて吾人は一意罪を避けて正に歸し、惡を離れて神意に合し、勉めて心情内部の悅樂を買はむとす。我も然り人も亦恐らく然るべし。されど吾人は先天的聖哲に非ず、又神佛にも限ざる也。知慮足らず才德完からず、罪過の中に吸々齷齪として日々思はぬ罪過に心悶へ、内心呵責の鞭に苦しみつゝあるは否むべからざる一大事實なり。

何人も善と認めずして、行爲するものはあらじ。然も其の行爲の一度顯現せらるゝや、必ずしも豫期と豫想とに從ふものに非ず。時には正反の結果を齎すことなきを保せず。此の刹那吾人の胸裡には一種高度の苦悶を起して此の結果を極力自己以外に排除せしめむとする努力と、他方には又行爲者其の者は慥かに自己なりてふ意識とを切實に喚起し來る。あゝ此の矛盾的撞着、吾人の胸裡は清波濁波混沌として相攻ぎ、道義的呵責の鞭は切りに我が内心を襲ふて平安ならむと欲するも得ず、況や吾人が日々に進み行く品性に依て、過去を顧み現在を思惟し思を過ぎし行爲に注ては、一種不穩の情なき能はざる場合一にして足らざるをや。噫人生は之れ罪過不穩の道程とも見るべきか。

斯く觀じ來れば、罪と云ひ過失といふもの、必しも自ら意識せし不正の行爲のみに依て生じ來るものに非ず。一意正に就き善に進まむとする有德の人と雖も、

精細に之を觀すれば必ず多少の罪はあり罪過はある也自ら揚言して我に一切の罪なしと云ふもの、我れ不幸にして未だ之を認知する能なきを憾む。ポープが有名なる「人間論」の中に

To error is human, to forgive divine

と云へるもの、目下我が人類に對する感想とも見るべき歟。

あゝ罪過の人にして然も罪の意識を生ぜざる人ばかり此の世に怖るべく悲しむべきものはあらず。過つは人の常、許容すは之れ神の業也。誰か此世に一切罪過の影なしと云ひ得る者ぞ。

さるにても我れに罪あり過失ありてふ悔悟の一念に到達するを得べき人は、世にも稀なる幸運兒なるかな。何となれば其の人はやがて神の許容を得べければ也。救の道に入ることを得べければ也。悔悟は其れ自身既に改善の第一歩に進みたるものと見るべく、人は唯正につき善となることに依てのみ、惡を惡とし罪を罪とするを得べければ也。聖書は吾人に敎て曰、「爾曹之を知つて此の如く行はゞ幸なり……（ヨハネ十三〇十七）」と。然り吾人は眞に美しき幸福の實を得むとせば、必ず先づ之を知り之を行はざるべからず。棚上の牡丹餅と雖も倘ほ坐しては遂に得らるべきものに非ず。げにや知ると行ふとは正しく之れ幸福の宮殿に入るべき驅馬の兩輪たる也。

古昔、歐陽明は知行一致の說を唱へ、グリースの大哲ソークラテスは知即德の說を出して、人は先づ事物の眞相を知悉せざるべからず、知は之れ德に入るの門德行なきものは所詮は之德に對する知識の缺乏を證せるもの Virtue is Knowledge なりと觀ぜり。兩者各其の說く所に多少の相違はあるも、知ると行ふとの二を以て德に進み善に入らむとする道程たらしめし一事に就きては吾人の主肯するに難からざる所、聖書の所謂「爾曹もし之を知て之を行はゞ幸なり……」と云ふもの即ち之なり。

然も吾人竊に思ふ。知ると云ふ事實其物は必ずしも多大の價値あるものに非ず。「知るは行爲の前提」と觀

じて始めて無限の力と活躍せる生命とを齎らし來るには非ざるなきか。吾人は知識を行爲より分離し、知其物に向て多大の價値ありと思考するに苦しむ。知は樹林の根帯となり、行爲は其が幹枝緑葉となりて蔚乎の美を點ず。謂はゞ行爲は外的表現にして知は內的方便ともみるべき也。然も知を得ずむば行爲する能はざるが故に、知は行爲よりも貴しといはむには餘りに數理的なり。知と行との密爾たる接觸は吾人をしてそゞろに天地配合の妙機を暗示すると同時に自然律其物に向て猶ほ生ける尊崇の情操を禁ずる能はざらしむ。知るは元より可し。行ふも亦更に可なり。然も知ると行ふとは決して分立游離せるものに非ずして、體を異にし相を別にする一個物と觀するを至當とす。

世に骨董品道樂者なるものあり。常に異を求め古器古物を蒐集して賞翫措く所を知らず。古びたる一小茶器に數百金を投じて惜まず、一軸の古書に數萬の富を抛ちて一意鑑識眼の高きを傲る。然も之れ隱遁者流のこと、活氣充溢、奮進向上の道程にあるものゝ一顧をも値せざる所なり。

世には又罪過を翫賞して自ら樂しめるものあり。罪の意識を意識其物に固定して一意自己眼識の高きを傲り向上の歷程にあるを喜ぶ。あゝ之れ骨董的罪過の翫賞者として、一種の隱居的舊套に囚はれたるものに非ずして何ぞや。彼等は淺間しくも自己の罪過を神に歸らず、大能の御手に委ねず、自ら許容し放擲して自足の埒內に歡喜せるもの、之をしも道樂的、骨董的と云はずして將た何とか謂はむ。

罪過は必ずしも其が意識のみを以て滿足すべきものに非ず。之を悔悟し痛切に自己行動の上に適合することに依りて、始めて其の價値を發揮し來る。蓋し品性の修錬といひ、人格の向上といふもの、亦一部は自己罪過の自覺と悔悟改善の結果とに外ならず。假令罪過を罪過として認知するを得るも、之を行爲其物に適合し改善するに非ずむば、何ぞ彼の滔々たる骨董的翫賞者流と撰ぶ所あらむや。吾人は殊に語氣を強めて云ふ。罪の意識其物を以て直に品性修錬の表象なりとするは

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

根本的に誤れり。罪の意識と品性修練との間には尚是れ以外「切實なる悔悟」と「生きたる改善」及び「罪の利用」等の諸楷段を通過せざるべからず。元より罪の意識は品性修養上根本的一萠芽として之を尊重視するは可し、然も一躍直に終結に到達せしめむとするは看過すべからざる罪劫の事と謂ふべし。吾人が幸福を得むが爲に、恰も知ると行ふとの代價を支拂はざるべからざるが如く、品性修錬の佳境に到達せしむるには單に罪の翫賞のみを以て滿足すべからず、進で之を哀情に悔悟し、生ける日常の行爲に適應するの覺悟なかるべからず。

蓋し罪過に對する吾人の義務は罪の意識以外、尙ほ其の反動を品性の上に得むと欲する欲求に外ならざる以上は、此等罪過の中に含まれたる行動の意義と、其の衝動の間接化とを得むが爲に、先づ自己の過失と罪過とに向つて反省し顧慮するの要あるは言を俟たず。ゲーテの名作フアウフトの一巻は能く此の經路を明示せるもの、吾人の特に興感を深ふしたる所以也。

然も高きを望まざる心情は恒に地上を匍伏す。元より過去の罪惡を意識するは現在の我れ理想の境致に到達せむとする道程たるに於て必須必至のものたるや論を俟たず。竊に恐る、吾人は世俗一般の人が單に罪過を意識し翫賞するに止まらば、吾人の注意は悪行爲其の物の上に固定し凝結して、進歩活躍の道を杜絶するの憂はなきか。否、此の如くむば吾人の品性は唯罪過をのみ眺めて現在の標準と過去の標準と此に調和の機能を逸して、年と共に愈離隔分立するの已むなきに至るには非ざるなきか。

罪の意識、悔恨の動悸や誠に可し。然も吾人は先天的に罪過と悔恨の意識とを利用する機能あることを忘却せざらむことを要す。蓋し之れ余が此の一文を草して讀者諸子の反省を求めたる所以也。　（完）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

風俗改良に就て

女子高等師範教授　宮川壽美子

日本と西洋との最も著しい相違は、いふまでもなく家庭の狀態でありませう。一概に家庭と申しましても日本では親や姑さんなどが本位ですが、西洋では若夫婦だけであります。日本でも偶若夫婦だけでホームを造つて居るものもあるやうに、西洋だつて姑さんと同居するものも稀にはあります。けれども概して申しますれば日本と西洋とは家庭組織の上に於て全然違つて居ります。

勿論日本にも西洋にも得失はあります。が、私は思ひます。神樣が若し東西兩洋の家庭を御覽になりましたら、何と仰向るむでございましよう。一目して判斷はついて居ると存じます。

先づ西洋家庭の特徵から申し述べまするとー第一氣樂で、一見した所。如何にもスヰートな空氣に滿ち〳〵て居るのでございます。何故ならばホームには我が愛する人と小供と召使だけである。誰も別に干涉するものがムいません。けれども日本の家庭ではなか〳〵さうは參りませぬ。良人の妹さんに失禮なことをしてならぬ。年寄りに對してあつかましいと思はれてはならぬ、金錢上のことなども姑さんの一言で壞されることもある。それは〳〵一通りの苦勞ではありませぬ。下女だつて左樣で、今日は日曜だと云ふので別に物見遊山に行けるといふわけではありませぬし、天氣が好いからと云つてまご〳〵しようものなら直ぐにお仕事を言い付かつてしまふ。西洋では之がないのです。云はゞ西洋の家庭は萬事がスヰート式に行つて居ります。だから妻となる

人の心掛一つに依て如何樣とも理想通りに處置することが出來るのでございます。

それから日本の婦人はおしなべて今少し獨立の精神を養成して置く必要があらうと存じます。西洋では兄さまが幾ら金持であつても、妹や弟、其の兩親達でさへ全く獨立して居ります。決して弟や妹さんなどが兄の財産に依頼するやうなことは毛頭ございませぬ。ちと極端でございますが彼地では父と子との生活は別物で、親子の間柄でも馬車代が幾ら、茶代が幾らだといつて財布は自然別物になつて居ります。日本のように兄のも妹のも一家すべての費用が母の懐中にあると云ふわけには參らないのです。それが出來なければ結婚も出來ぬと云ふ風で、獨立心といふものは斯の如く共通的になつて居ります。之には少くとも三種の特質がムいまするが同時に亦多少の弊害も伴つて參ります。彼の地で未婚者の數が比較的に多いのも之が爲でしようと存じます。かやうなスヰートなホームは誰だつて一度は持つてみたいのですが、少々な金では行けないのです。と云ふのが一般に生活狀態の高い彼の國のことですから、良人の衣服も小供の衣類も皆裁縫師に任せるやうでは迚も駄目でございます。此等經濟上の狀勢は引て未婚者の數を增加するに至るのでありましよう。次に克己の精神を妨げることが多い。概して日本の婦人ほど辛捧强いものは世界恐らく無類でありましよう。之も小い時分我が儘をさせず育てられるので、自然此の良風を生み出したのでしようが、西洋は萬事がのび〱と取扱はれる。日本では「眞の親でさへ氣に入らぬものを他人樣がどうして……」と叱られるのですが、西洋ではさうではない。萬事が寛大にのびやかに育てられるのであります。之は一得一失で、兩者の優劣は見る人に依て多少の相違があることと存じます。第三は養老院の設であります。彼の地にはヲークハウスといふのが幾らも建つて居る。之は始め宗教的のものであつたのが今日ではプアーレーヂ Poor-rage を徵つて六十歲以上の貧民を送り込むことになつて居る。此等は人情の如何にも薄いことを示して居るものと思ひます。幸に日本あたりには一つも

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

此の種の建物を認めぬのは嬉しいが、之と反對に日本家庭にも亦三種の缺陷があるのです。第一が家庭の苦しみ第二が若い時代に夫婦一所に出入の出來ぬこと、第三が諸壞れすることの多い事でムいます。特に親たるものが餘りに子供に頼りすぐるのは大に改良しなければなるまいと存じます。

斯様に觀て參りますると、日本のホームもあまり不利ばかりではムいませぬ。第一に未婚者の數が少い。男女夫々相當の家を持つて居ることは國家社會上よりみて大に慶すべき現象であらうと存じます。第二は先き程も申しました通り克己の精神に强いこと、第三は兒女の敎育に至大の利益を感ずること等であります。一家に年寄が居れば子供を一手に引きうけて可愛がつてくれる。世におばあさん位子供を眞心から愛撫してくれるものはありませぬ。從て感化も著しく及ぶことが出來ます。近松なども初菊などに於て此の愛情をよく描寫致して居ります。兎に角此等は日本の家庭が西洋家庭に一歩を進めた特點でありましよう。

私は英吉利に居りました時分、日本は如何して强いか、如何してあんな勝利が得られたものであらう……などと能く尋ねられましたが、英人は皆此の犧牲の精神を敎育に歸したのでムいます。私は特に家庭敎育に力を强めて申しました。日本の家庭には必ず御位牌がある。家長たるべき人は必ず之を支配して行くだけの權利がある。て、容易に分家を致しませぬ。「日本人は只貧之てあるが故に同居を强られる」と申しまするならば、侯伯貴族を始め富豪財産家なども等しく一家を守つて居る事實は如何しても分解らなくなる。之を所詮は位碑を守る責任があるからであると存じます。

英吉利のさる紳士が「日本の婦人には三從の敎があるといふが、女は生涯の中何時頭を上げて自由の身となれるか」と尋ねられました。成る程日本の婦人に三從の法があり外見上權利のないのは事實ですけれども、それはたゞ皮相の見てよく〳〵考へてみまするると、日本の婦人ほど權利を有ち、頭を上げて居るものは少ないと

存じます。母が一家の老父や老母に求むるときには皆實物教育である。もしや年長者に無理を云はれても我慢して無事に治まつてゆく。此等の法度は小供である。小供は直覺的に母の心情を觀破するのであります。一家に女が三人居る小姑(こじうと)が嫁に行く。でも小供が多いので支度が充分に整いませぬ。母親は自分の衣類持物を簞笥に納れてやる。此の時の母の心は如何(どん)なにつらいでしよう。此等美しい心情を思ふときに、そゞろ感謝の涙がこぼれます。犠牲の力は實に偉大なものではムいませぬか。かゝる家庭、かゝる境涯の中に人となつた日本婦人でムいますから何でも構ひませぬ。實際日本の女子は一家の主婦として大に頭を上げて居ると申さねばなりますまい。父と兄とは時に爭論をするが母親に對しては「我儘を云ふな」と一言の下に言ひ伏せられる。日本の女は其の實至大の權力を握つて居るのでムいます。

申す迄もなく日本は今諸種の點に於て過度時代にある。が此の特質は飽く迄も依續して參らねばなるまいと信じて居ります。勿論日本の女はもつと學問をせねばなりませぬ。勉强せねばなりませぬ。英吉利などはエリサベス王朝以來文化も富强も非常に高潮に達した。が今日では幾分か弛(ゆる)みかけて居るやうにも思はれます。之に反して日本は之から發展すべき新鋭の國柄であります。學問と經濟と共に大に向上させねばならぬ境涯に立つて居るのでムいます。婦人女子の責任は是から一倍と增大して參るだらうと存じます。

最後に風俗改良の二三を摘指して此のお話の結末を付けましよう。

嫁をいぢめることは日本家庭の通弊でムいますが之は大に改めねばなるまいと思ひます。同時に亦小姑たる人は少し心を和(やわら)げ互に仲よくして扶け合ふやうにしなければなりませぬ。若夫婦は必ずしも別居せよとは申しませぬが世の姑、小姑たる人はよく〳〵考へを此の邊に注いでもらひたいと存じます。

家庭教育は弱者に對して深く同情をもつやうに注意するのが肝要である。英國に於ては紳士(ゼントルマン)の方が却て行

儀が宜いと思ひます。注意してみると全く之れ母の力である。即ち男も女も同様に取扱はれる。兄を先きに妹を後にといふ日本式ではない。男の子がソファに倚る。すると母親は「男のくせにお前は何です、女に讓らないの……」とやる。そうすると子供でも男だてといふものがムいます。すぐに女の子に讓る。一體弱いもの苛(いぢ)めは男子のすべきことではないとしてある。一寸婦人の方を送つてゆくのにも、母は子供に向つて、ゴー、アウトサイド Go outside と注意する。子供は母の命令(いひつけ)同様に實行する。英國の紳士(ゼントルマン)はかくして養成せらるゝのでムいます。

私がリバプールに居ました時分、ミス、ヒユースに出會ひまして何か日本漫遊の折、日本の家庭でわるい所をお氣付きになりましたら敎へて下さいませんか……とお願ひ致しますと、ミス、ヒユースは曾て山口に旅行した時分、隣家の醫師の家で深夜まで三味や唄で騒ぎまわられて殆ど一睡も出來ず、翌日一時の會合にも間にあわず漸く出席して早速昨夜の始末を話して世の婦人女子たるものが之で責任が果せましようかと一場の慷慨談を述べたことを話されましたが、私も思はず涙をこぼしました。此等は大に人の妻たるべき方の注意すべきことであらうと存じます。旅館に付て思ひ出しましたからお話し致しますが、西洋では髪の整理は室内でやる。そして衣類をつけて食堂に入(はい)るのですが、日本では丸で反對になつております、それから手洗の水なども男女は別々にする必要がありましようと思ひます。

又宴席なども大に改むべき餘地は幾らもあることゝ存じます。殊に藝者などは酒席に侍せしむることは大に避くべきことゝ考へて居ります。此等は元々女の責任で婦人の當然主張すべき範圍でムいましよう。でも實際日本式の宴席では致し方がないやうにも思はれます。先日荒川領事が歸られまして、「宴席へ一切藝妓などを廢(よ)さそうと思つたが駄目です。之が西洋のテーブル式だと大變に宜いが……」とこぼされたことがムいました。成

る程日本式では給仕の女などの通る道は客の正面になつて居るので蝶々の奇麗な身拵でなければどうしても具合が惡いのでムいましよう。藝妓問題はまづ宴席改良問題を實行した後でなければなりますまい。兎に角英國の風俗がヴヰクトリア女皇陛下に依ていたくも、改善せられたる事實をみましたらば、婦人が風俗改良の上に如何ばかりの勢力を以て居るかゞ察知せらるゝことゝ存じます。（文責在記者）

イブセンの詩

秋田雨雀

近代思想の急先鋒として歐洲文學の革新者として、近時世界各國至る所其摸倣者を出さない所のないと言はるゝヘンリック、イブセン Henrik Ibsen はブランドといふ敬虔な行者の生涯を描寫して、戯曲の形をした大詩編「ブランド」"Brand"を世に出して先づ思想界と文學界とを震駭して置いて、之れから徐々として彼れが特有の思想を「ブランド」よりはもつと自然な、もつと自由な社會劇 Srocial drama として發表するに至つたのです。「ブランド」一篇はまあ詩として見ても比類なき立派なものに相違ない、序幕のブランドが一人の百姓と其の息子に案內さして雪の白く積つた此國の山を彼方の村へと進んで行く、山は高く野は廣い、道が知れない、百姓の聲とブランドの聲とは淋しい深い千仭の谿谷に響き渡る所ろ。それからアグネス夫妻の藝術家らしい無邪氣な然し危險な快樂、更らに最後の教會を捨てゝ浮世の眞の教會、偉大な道場へ行かうと言つて里人の一體を率ひて山を登る所などは、思想の上から言つても形式の上から言つても一種悲哀を混じた壯大な感想を讀む人に與へます。

けれどもイブセンが眞の詩として世に傳へられて居るものを見ると彼れが個人としての性癖なども能く解るし、後になつて世に出した色々な社會劇の內に表はれた一種のモラールの源泉とも見らるものが流れて居るのですから彼れが二三の詩を玆に口語譯にして紹介して見やうと思ひます。

○鳥と捕鳥者

子供のやうに、係蹄を私は造つて
其內に捕へた、一羽の紅雀を。
そして吾儘な喜びを昂じさして
どんな風に鳥が中てはゞたくかを見た。
この捕虜を急いで家へ持て來た時
私の喜びは高まつて來た。

が鳥が憤怒の目を注ぎ
消魂しく飛ぶので、私は驚いた。

遂ひ私も飽きて來たので
私の吾儘な氣も變つて來たので
机の下に私の身を隠して
そつと戸を開けて見たらば！

見よ、どんなに愉快に翼を伸したらう
外なる「生」と「自由」の方に急いで。
まつすぐに突進して——窓に對つた、
目くらみ、身を打つた、血が流れた。
捕はれた鳥よ、汝は報を得たのだ。
捕はれた子は今籠の中に震へて、
混亂して、窓に身を打ち、そして怖れて居る。
何故なれば、獄屋の外から彼れに
恐怖しい目がのぞいて居る。
そして其目は彼れに恐を送る、
嘗て彼れが紅雀を驚した様に。

そして少しでも開いたと思へば、
それは窓だ——自由は彼れを誘惑する——
破れた翼で籠の中を跳ね廻る
けれども、やつぱり禁錮されて居る。

凡てイブセンは世の常の淺薄な解釋や、不可解などいふ絶望を以て安んじて居る人てはない。何處迄も迷路の中深く別け入つて、もう疑ふ事の出來ない道迄掘當てないまては止まない人てあつた、次ぎの「坑夫の詩」はさういふイブセン自身の象徴と見る事が出來るのてす。

〇坑　夫

山は恐じい響を立てゝ破裂した
わがハンマアの重い一撃に。

そして深い底に落ちた
金屬の音の私に聞える迄。

深い山の夜の内に
美しい寶は、私の目を欺く――
ダイヤモンドだの其他無數の寶玉は――
燃え立つ黄金の脈の内に。

深い所に――あゝ、そこに平和がある――
平和と空漠の地――生活の終止！
ハンマアに隱されたるものゝ心に
お前の道は小止なく裂いて行け！

坑内の眞夜中に美しく笑む日は
太陽と歌と供に暗の穴の内では
もう既うに忘すれられてしまつた。
子供らしく、星ある空の下に

私は幾度、喜んで座つたらう。
花咲く春の道を私は踏んだらう。
私の心に神の平和が宿つて居た。

私は初めて其處へ下りた時は
罪もなくから考へて居た事もあつた。
深い所を領する靈魂は
深い謎を説明して呉れるだらうと。

けれども何等の靈魂も話して呉れない
そして重い闇が裂ける計り
智識が持つて來る何等の光もなく
物の根を照らす光もない。

然らば私は誤つたのか？眞實に
私の此道は光明に向ふ道だらうか？
なぜなれば、私は高い所に光を求むると
太陽の光は私の目を盲目にするから。

いや、尚ほ深く私は穿て行かう！
そこに、永久の平和がある。
ハンマアよ小止なく道を裂いて
隠されたる物の心に對つて行け。

ハンマアよ打て、打てよハンマア
生活が向上の苦痛となる迄で！
けれども何等曉の光は私の上に來ない
何等の希望の光は私の前に表はれて來ない。

夜の深秘

木山一夢

左の一文は在福知山某聯隊付の一夢兄より生宛に發送せられたるもの、情緒綿々として秘すべからざるものあり。友の同意を得て此に掲載することゝなせり。……（櫻爾生）

早稲田の學園に親しき兄と別れてより早や九ケ月、軍隊生活も弱き身ながら隨分慣れて兵舎も練兵場も自分と親しみ深いものゝ一つとなつた。川副兄！僕は去六月より凡ての練兵をやめて看護學修業兵を命ぜられて毎日隊から此病院に通つて居ますが、此の暑いのに兵士の身の上を思ふて見れば實に愛憐同情の涙が出ます。白状すれば入營以前には僕は兵士といふ者に對して一種の氣の毒な運命の人達ちである、といふ感じは常に持つて居たが、自分の周圍の事ばかりに心引かされてさまで深くも考へなかつたのです。ところが兄も知らるゝ通り學の中途で突然軍隊生活の身となつて非常に異つた此の世界に來れば兵士といふものゝ身の上の可愛そうなことと不憫なことと……此頃はね、兵士も午後は練兵はありませんが、夜に入りての樂みは午後の九時の點呼後から同十一時迄は納涼時間として舍外營庭に出て自由に納涼を許されてありますので、是れは兵士にとりての無上の氣休め時だらうと思ふのです。納涼を經なければ斑に歸つて直ぐ寢やうとしても、人數が多いので、中々暑くてねられませんからね、私も一番親しい戰友と二人或は三人、又時によつては一人で極めて他の兵士の來ない涼しい寂しい場所に行つ

て凉をとるのを此の頃毎晩の樂みとして居ます。舍内に居ては中々ガタ〱して少しもユルリとした時間が無いので別に何も考える事もなくて打過ごしますが、あの寂しい人數の少ない夜の暗い木陰のベンチに腰をかけて親しき友と顔打まもる時には一種いふべからざる感じが起てね、時には其友は私の名を呼んだきり私はまた友の名を呼んだきりて、久時は亞ぐべき言葉もなくて心絃相觸れ心緒相通ずるの境に殆ど相擁せんばかりに感應融合する時があるのです。しんみりとした話は、心鏡相映ずる友と人無き陰に寄り合つた時に自のづから起り來る一種の神秘ですね、軍隊のやうな殊に最も下層にある兵士の身で只朝から晩まで上官の命是れ自己の動作で瞬時でも自己の思念を働かすとの出來ない、極めて忙がわしい極端な現實主義の世界に居て、若し此の夜の神秘がなかつたならば、迚ても私共は生き得ることは出來ますまい。多忙の中に、現實主義の世界に圍繞われたる身に却て優しいデリケートな感は起るやうですね。思想を練るといふことが專門でない。否な常に思想界を撲滅せんと企てゝ居るやうな此世界に於ては、却て學問の臭氣を帶びない理窟を離れて極めておとなしい感想が湧き出るやうな氣がします。マバラに耀やく星の光りを仰ぎ、西の山の端にかゝれる三日月の優姿を打眺めては人の身の運命のはかなうして而も人生存在の眞意趣を囁やくかの如く、俯しては點々光る人界の燈光を打眺めては懷かしき母の在ませし去歲の溫かりし團欒の床の思ひ偲ばれて今更ながら再び接するに由なき慈愛の泉に戀しさ懷かしさの念を禁ずる能はず。友との語とては一入深沈を加へて慈親の限りなき御心の底知れず味ふのを何よりの樂みと致して居ります。

慈親の限りなき御心、是れ正しく世に比べなき至誠の一念、我等より眺めたる慈親の愛ほど世に偉大なるものはありますまい。此の偉大なる至誠の御こゝろ此の愛の結晶に思ひを凝らす時我等は一歩深く宗教の天地に馳せ入りて、こゝに此の變化生滅極まりなき浮世の上にゆるぎなき至誠の結晶大慈大悲の御親の御こゝ

ろに渇仰歡喜の思ひを禁ずる事が出來ませぬ。我等の宗教は此大慈大悲の御こゝろに動かされたる時の信樂の一念に存するのでござります。

凡ての兵士にとりて最も偉大なる甘露の惠みを與へて呉れるものは夜の睡眠でありませう、睡眠！熟睡!!あゝこれ兵士の生命であり、兵士の慈母の懷ろでありませう、これが無かつたならば凡ての兵士一人として生き得る者はありますまい。

彼等は年若き身の故國遠く離れて、嚴肅なる規律の下に身を委ね今まで知なかつた浮世の味ひをしみ〴〵と心の奥底深く感ずるのです。滿二十歲を適齡と定めてはあるが實地に調べて見れば半數以上は二十二三歲以上の人が多いやうです。是等の數多き兵士の中には戀しき妻のある人もあれば、生れたばかりの子供、留守中に生れた報らせに獨りほゝ笑む人もある。其中にはまた悲慘な事も少くない。私が入營以來數月の間にさへも、私の所に來て「どうぞ宜しく御願ひ申します」と我が子の死んだことや我が妻の病厚きことや、或は病死したとか、或は極近くに出來たことはやはり私の班の人で極めて正直な男であるが……「御前は關係に在る身だから心配させまいと思つて實は秘して居たが、秘しても早晩は知らせねばならぬ事柄なれば今知らするが、實はこゝ十三日前に御前のお母樣は死なれたのだ。此報らせを得たら如何ばかりお前が悲むか知れないけれど此の世の中の事だと諦めて　天皇陛下に任せきつたる身なれば決して心動かさず專心御奉公怠るな」云々の手紙がついた。

あゝ木石ならぬ人の身の如何ばかり悲しいでせう、如何ばかり倚りないでせう。それに班の上等兵班長としたこと、慰めてやるどころか「お前も馬鹿だが御前の家の人も隨分馬鹿だね、十三日前に死んだことを今になつて知らするといふ間拔け奴！」兄よ、我れに涙もろしと咎め給ふ勿れ、我れは動もすれば步兵班長の言に雷同せんとせし兵士を叱しぬ。我れは彼れの靑ざめたる、低首れたる姿を見るに堪へざりき。消燈後人なきところに引いて彼を慰めぬ、數日を經て余は彼の

宗敎を問ひぬ、「彼は眞宗であります」と答へぬ、「お母さんはかねて御說敎など聞きに行かれましたか」と問ひしに能く行きまして、喜んで居りましたやうです」と、兩手もみ〳〵丁寧に答へぬ。余も亦眞宗の信者なりと語り、幸ひに昨夏失ひし母の一周忌日此月而も此日曜に當れば、軍隊布敎師の住寺に至り讀經を依頼し兼ねて數名の戰友と共に法話に預らん計畫あれば、君も亦共に來りてお母さんに對する心盡しと思召しては如何に」と問へば彼は我れと宗旨の一なるを聞いて喜ぶ事限りなし………やがて土曜の夜となりて明日の外出嬉しと皆打喜べる中に、同級相合することの何ぞそれ難き、彼れは中隊の命令によつて、歩哨(番兵)としての重任を擔ひぬ。

我れ前約堅ければ如何とも爲し難く一先づ其日丈けの約束を履行せん爲め數輩打つれて營門を出づ。折しも歩哨として直立せし彼の一瞥！彼は嚴めしき武裝の勇姿に、なほ抑へきれぬ暗涙を雙眼に催して居た。あゝ此時の光景！察し給へよ兄!!!

◎新刊「ひとりぼっち」に就て

一讀者

これは河井道子辻村靖子兩先生の御共譯になりし極めて趣味深く且つ有益なる家庭小說であります。實は自分が讀むで大へん面白く感じましたので愛する姉妹方にもぜひ御一讀を切望して一寸こゝに御話の大體を御紹介致し度いと思ひます。

主人公はペテと申して今年七つになる誠に可愛らしい天使のやうな英國の一少女であります。ある時聖書を見て居るとふと目にとまりしは默示錄七章の十四節。自分は未だ困難といふものを知らぬから天國に入ることは出來ないかと小さき心をいたく惱まし樣々の人に困難について尋ねて見ましたが、この無邪氣な煩悶はなか〳〵消え去りませんでした。然し。ペテは此間に幾人かの失望や艱難に沈める人々に接しては眞心よりのあつき同情を天眞爛熳に表し寄する事を以て不知々々のうちに彼等を暗き淵より救ひ出して喜びの光明に導くといふ神の使をして居たのでした。處が不意の出來事でペテの愛犬プリンスは主人を救はん爲に命を捨てゝしまひましたので、ペテの歎きは一通りではありませんでした。然しこれによりて始めて困難を知り自分も彼の聖句の中に入ることが出來るとて感謝の祈りを捧ぐるといふ實に美はしき物語でございます。

博文館の出版で定價は六拾五錢、大抵の本屋で取次いで賣つて居る筈で御座います(完)

宗教の撰擇

植村正久

イエス其の十二弟子に示し畢しとき此處を去り道を教へ廣むが爲に彼等の諸邑に徃り。偖ヨハネ獄にてキリストの行し業を聞き其の弟子二人を彼に遣して曰せけるは、來るべき者は爾なるか又われら他に待べきか。イエス彼等に答て曰けるは爾曹が聞ところ見ところの事をヨハネに徃て告よ。瞽者は見、跛者は歩み、癩病人は潔まり聾者は聞き死たる者は復活され貧ゆ者は福音を聞せらる。凡そ我ために躓かざる者は福なり。

今引用した馬太傳第十一章の數節を讀でみるとヨハネといふ人が獄に入つた。大變に苦しい境涯である。其内にどうもエスといふ人が現はれてメシアたるの實を示して居る。けれどもヨハネはまだ一切をエスに任すべきか、はたしは他にメシアの出現を待ち望むべきか彼の心には決心がつかぬ。といつても身は牢獄に囚はれ人となつている。身體の自由が出來ぬ。で二人の使を遣してエスに此の事を尋ねにやつた「爾曹がみ聞くところをヨハネに告げよ………」とは此の時エスが二人の使者に答へられた言葉である。

讀者諸子の中には勿論此の如き疑惑はあるまいが世には隨分と此の種の境涯にある人が少くはあるまい。己れの信ずべき宗教は何であるか換言すれば宗教は如何樣に撰擇すべきものであるか、此の問題に就ては隨分苦しむで居る人があるらしい。否、信ずると云ふ生活問題に就て不可解といふ霞の中に閉ぢ込められて居るものが存外多いやうに思ふ。こないだもそんなことがあつた。或るおばさんが私の所にきて「私の息子も其の嫁も熱心な基督教信者であるが私は法華の信徒だけにどうしても決心が付きませぬ。親代々日蓮宗で位牌も佛壇も皆日蓮宗であるのに今更之を改めて基督教徒になすのはどうしても祖先に對して面目がない………」とかう云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ふのである。彼等は既に基督の門口に近よりながら未だ其の堂にはいることを躊躇して居る。こんな境遇に居る人は隨分世の中に多いことゝ信じて居る。君の姓は何だ、源氏だ。淸和天皇の後胤………などゝ讀み上げる。一體日蓮宗の起つたのは近々六百年前位のことだが其の家の系統が何百年位續いて居るかは知らむが日蓮宗の起らない前、乃至は日蓮宗を自家の本尊と崇めた當時は果して如何であつたらう。祖先は自分が宜いと思つたればこそ日蓮宗を奉じたのである。何も信仰の對象を祖先に對する義理立のみに依て左右するには及ばない。といつてもおばさん自身に取つては由々しき一大事件である。一寸外の方からみると何でもないやうだが其の裏面には色々な事情が籠つて居ると思はれる。どうもある一派の哲學者などに云はせると今に世界の宗敎を統一するなどゝいつて居る。實際世の中には宗敎の宗派が多すぎる。何處に行き何れをとるべきか、一寸迷ふ。遠くから見ると數萬尺の雲表に聳えてどうも登れそうもない。或る者は蒼々とかすんで居て谷間から先は一寸も見えぬ。だが世の中の人は徒らに不用の心配をのみして居るが此等は必ずしも宗敎の山路を上るといふ考へがなくして只徒らに遠方より詠めくらして居るものである。日數を踏むで上つてみると色々な道がある。淸らかな泉も湧き上つて居る。花も咲いて居れば鳥も歌つて居る。面白い、心より愉快である。遠方から心配げに見上て居るものと實際に上つて見るのとは大變に違ふ。例へば婚姻でもさうである。好い良人や立派な品格の妻を撰ぶには男女共に相應の心配をして相當に吟味もすれば身元檢べなどもやる。けれども天下には何萬何千萬といふ人が居る。一々其の人々に當つて良否を檢するといふわけには行かぬ。又不必要である。一體宗敎といふものは決して撰擇すべき性質のものでない。日本に幾々らの宗數があるから之を一々に吟味する。馬鹿な話だ。全體世の中に眞に基督を味ひ佛敎を咀嚼して居るものがどの位居るだらうか。大抵のものは之を遠方から望見したものに過ぎないやうに思はれる。兎に角世人が心配して居るやうに現在宗敎といふべきもの丶

中には多過ぐる程澤山の宗派が傳へられて居る。が問題は自ら定まつて居る。私は此に佛敎と基督との二ッを擧げて吟味を加へてみたらば其れでもう澤山だと信じて居る。

あながち專門家ならずとも自己が欲し望むで居るだけのことを知らうとすることは別に六ヶ敷ことでもなければ又不可能のことでもない。殊に或る道筋に就ては既にもうちやんと分解つて居る。基督敎にあつては神は常に我等の祈を聞き我等を愛し同情の熱を以て切りに我等を呼びさまし給ふ。我等の心に依て思ふよりか一層切なる愛情を以て切りに神の方よりして我等を尋ね求め給ふのである。佛敎に於ては此の愛情がない。人が苦しみ惱み悲しみ憂ふることがあると此等一切を煩惱と呼て此等の苦痛より脫却せしめんとする。之が所謂佛の救である。然るに基督敎では罪より脫れることが第一である。是が根本的に違つて居る。心を安じて些の苦みなく一切煩惱を脫して眞如の光に接する。之が佛敎であるが基督敎ではもつと大きな所があるやうに思ふ。自分は專ら神に背いて居る。神と自分との距離が遠い。神と遠かつて個人的であるのが自分には何よりも苦しい此の苦しみの中より救ひ出さるゝのが惠みである。佛敎あたりでは罪障消滅といつて各人には一種の罪があるが其の罪といふのは憂、悲み苦痛などいふのが重なもので神と遠かつて居ると云ふわけのものではない。只自分一個の苦惱を脫しやうとするのだ。然らば此等一切の苦悶は何處より來るか。之は元來コスミックのもので世界其の物に附着して居るものである。此等は大變に違つて居る。のみならず救はるゝ方法に就てみても非常な相違がある。基督敎では我を愛し給ふ神樣の中に自己を潛めて一切を委ね信頼する。此に始めて救の道が横つて居るのである。即ち神樣の中にかくれるのだが佛敎に於てはさうは行かぬ。自分で自己の理想を完成する。此處に佛敎本來の救があるのだ。のみならず佛敎的品性と基督敎的品性との間には非常な相違がある。此等は正しくみたらばすぐに分解ることとて若し諸君が之を研究しようと思つたらば圓木と云ふ人の書いた世界文明

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

史がある。是には基督敎の道德と佛敎道德の感想とが述べてある。非常に面白いもので其の邊は少からず讀者の感興を引きつけるのであるが私は決して佛基兩敎の對比論などはしない。元より宗敎に對しては徵兵檢査みたいなことはよして、夫婦の約束や婚姻のやうに依心傳心にやる方が宜いと思ふ。

私は嘗てマッキントス先生のシェクスピヤの筆記を見たが罪に關する非常に面白い記事があつた。實際シェークスピヤなどを讀てみると佛敎などには決して見ることの出來ぬ罪が現はされて居る。だが之だけではどうも私は不足に思ふ。基督敎道德と佛敎道德に就てみるも讀者の多數は既に御了知のことゝ思ふが私は今此の二種の道德に向て判決を下すやうなことはしない。たゞ基督敎の特點に就て明白に話した方が宜いと思ふ。

私は今の銀行なるものに就ては餘りよくは知らぬ。が其の倉庫の掛りの人に會つて聞いてみると金銀の眞否を辨ずるに始終眞物ばかりを見る。さうすると何時のまにか僞のものは自然と見別がつくやうになると云つたが實際さうであらうと思ふ。私は皆さんがあれやこれやと他方に氣を散らさないで一ッ專心に基督敎を咀嚼してみたらば其れでもう十分だと信じて居る。一ッ心に留まつたものがあつたらもう去就の途は大抵定まつて居る。だから先づ第一に基督敎を研究してエスの道に入つてみる方がよい。自分が基督の道を開きエスに接してどうしても捨置けないといふ心持になつて神の道に入つたものが幾らも居る。どうも聞き流しにするわけにはゆかぬ。何とか自分で定めなくてはならぬ。其處に妙な力が潜むで居ると思ふのである。妙な力といつても別に不可思議といふ程ではないが一度エスの敎に接した爲に自己の心中に今迄潜むで居た色々の思想が俄かに堀り出されたやうな感じがする。いはゞ今迄自分が少しも知らなかつた事がエスの道に入つた爲に一時に開發せられるのである。かくて基督敎は眞の意味に於て自分を發見せしめたものと云はねばならぬ。實にエスの敎ほど偉大なものはない。

一體科學の前には國民的などいふ感情は寸分もない。元々科學は宇宙普遍の眞理である。宇宙普遍の眞理に日本だとか英吉利だとかいふ國民的觀念のあらう筈はない。宗敎などもさうで決して一國民族に依て專有せられべきものではない。基督敎などは元より國民的に云々することは好まないけれども如何も何處となく具體的な所があつて國民生活を全うせしむるものがあるやうに思ふ。之は大に吾等の感謝すべき所であると信じて居る。

話が色々と多岐に亘つ複雜してくるが基督敎を大體に考へて見ると、先づ人といふ者は如何しても自分一人では生活するわけには行かぬ。必ずや生みの親がある。空氣を吸ひ水を飮む。如何考へてみても吾等は現世に於て自分一人でないことは事實中の事實である。私は此處に根柢を据へて今少し論及してみたいと思つて居る。自分が斯うゆう風に生れるのも、斯くの如く生き長へて居るのも何か其處に力がなければならぬ。否其の力の源泉がなければならぬ。私はかく信じて居るのである。

此に一人の小供が居て母の懷に抱かれながら笑つて慈母の顏をつめつたり膝を汚したりして喜び樂むで居るものとする。之がもし當世風のハイカラ連中ならば其れ迄だが、是は母である如何いふ品性の人であるなど云ふことは一切知らない。否考ふる能力がないのである。けれども何だか我れ知らず一身を任せて依り賴むで居る。心から安心して喜び勇て居る。母の顏を見ては笑ひ樂むで居る。母も亦一意愛憐の至情を傾けて幼兒を抱き保護を加へてやる。何か知らむ偉大なる力が潜むて居はしないか。私は確かに一種微妙の力が働いて居ると信じて居る。元より母にも幾多の種類がある。が然し其の母たる人が我を生み我を愛する慈母であつたら吾等はどんなに嬉しいだらう。此の喜悅はやがて孝となつて現はれてくる。親子共に死の苦しき經驗も試み苦痛艱難も耐え忍ぶ。親子一所であれば世は如何に荒浪が狂ひ立つて居ても苦悶の嵐が吹き付けてきても其れ自身既に幸福である。丁度之だ。考ふれば考ふる程此處に何かしらん生きた力が潜むて居るやうに思はれてならぬ。鬼か

蛇か將しは眞の神であるか其處迄は分解らぬが何か知らん其の間に動き働いて居る一種の力がある。一體其れは何だらう。分解らない。名前はわからぬが唯人間であることだけは間違ない。母であるのかも知れぬ。いや矢張り人間だ人間に違いない。斯うなると天命の觀念が湧いてくる。もつと進では天地皆是神命であると考へる。此天なり命なりといふ考が神といふ考に到達するのである。人を支配するものは四つ足ではない。大丈夫人間である。お父様、お母様、此處迄くればなか／＼たいした考へである。けれども唯天命だ運命だなど〻ボンヤリした考では幾分物足りない水臭い所がある。之は父である、天の父であるといふ自覺に導き入れたいものである。然して其の父は我を愛し我を保護する愛の化身であると進でくる。即ち此の世に唯一人のエスキリストを下し給ふた慈愛の父であると考へ及ぶやうになる。其處に始めて神として愛と憐れみとを下し給ふ嬉しい喜ばしい人格的の祝福を觀ずる。否其愛なるエスが日本の國に生れ給へることとは大なる神の愛、神の恩寵であると思ふやうになる。之が信仰である。奉仕である。世の中には無暗に信仰といふことを資格張つて解釋するけれども其れはいけない。信仰は情愛の關係である。心と心との交通、品性と心ばえとの感應、意氣の投合、胸と胸との一致、之が誠の信仰である。愛する賞するほめ稱へる。天に向て一意向上する、之が即ち信仰である。之れより結構なことはないわけである。基敎の信仰といふのは斯の如きものである。かくてこそ始めて信仰は人を救ふことになるのである。鰯の頭も信心から………信仰は決してそんな固苦しいものではない。道德の最も麗しいものである。人の生命を支へ人に力を與ふるもの　、愛を以て生命とする天父なることを認め一意心を傾けて孝を盡す、其の心榮が即ち眞の信仰である。中江藤樹の孝の心を讀むで御覧なさい。彼はキリストは知らなかつたが然も尙ほ「肉のみならず肉以上の者に仕ふるより大なる孝は非じ」と云つて居る。不十分ながら其の心意の抱負は十分に表はされて居る。私は常に此の一節を讀で非常に感服して居るが生みの父母に對

する根本的以上の孝道、之が藤樹の説である。然るにエスキリストは二千年の昔、既に明白に精確に此の理を外部に敎へられたのである。然し人間は決して其れ丈けではない。親子以外尙ほ兄弟もあり姉妹も居る。一人では淋しい、兄も妹もあつて欲しいものだ。西詩には花間に戯るゝ蝴蝶を見て兄を思ふた少女のことも載つて居る。支那にも張九齡の詩には自分の弟がグラ〳〵と遊び暮して今宵も亦つまらぬ遊に耽つて居るだらうと思つて嘆じて居る詩があるが、私は此等を讀む每に非常に慕はしい感想を浮べるのである。我等は矢張り神の子ではあるが其の實、子たるの心がない。やつと目が開きかけた位にすぎぬ。世には一意自らを守つて居る爲に讃美を知らぬ人も往々にして居る。あゝエスであるエスである。エスは世にも稀なる神の子である。吾等が信仰は一體に乏しい。活眼を開いて信仰の道を歩み行くべきである。エスキリストが吾等人類の爲に如何なに苦しみを受け給ふたか、之を理解して我心に植け付け引て人を敎ふる。此に淸らかな信仰の閃きがあるのである。かやうに父が分解り一人の保護者を自覺する。かくて始めて吾等の心の中に眞心より神を信じて「神よ我罪を許し玉へ、願くは神の前に跪くの榮を得しめ玉へ」と祈り求める。之れ即ち神の國に一步を進め入れたるもので、神の救に浴したるものである。斯樣なつてくると家庭に對しても友に對しても又學校に於ても、始めて善なる行爲が出來てくる。喜て人生を樂しむことが出來る。一家團欒して平和の中に一種嚴かなゆかしい空氣を經驗することも出來る。餘所の家ではやれないことが自分の家では平氣でやれる。賤が伏屋、如何なる家庭の中にも和樂の風は薫つて居る。天に在す父、其の愛なる一人の父を頂き、生れながらの神子を以て地上に美しき神の國を作り給ふ。其處に不思議な力がないであらうか。風は氣儘に天地を吹きまくつて居る。然も其の何處より來て何處に行くかを知らない。靈は氣儘に動く。然も決して器械的ではない。生きた精神に滿ち〳〵て居る。我等もし眞に神の氣に觸れ神の力を經驗しようと思つたらば必ず先づ神とエスとの關係を明めねばなら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぬ。我を導き給ふ御心態度之を理解せねばならぬ。かくて一切の苦痛を忘却することが出來る。自己以上の力を經驗することが出來るのである。兎に角吾等はエスの心に分け入つてエスの精神を了得しなければならぬ。世にかゝる教へ、かゝる救の道があるのは此の上もなき幸ではないか。

私は今粗雜ながら基督教と佛教とが罪の觀念の異なる所、神救の方法に相違點の在る所を指摘して置いたが要するに基督教は情的宗教である。人情を有つて居る宗教である。從て親子もあれば兄弟の關係もある。一家團欒の樂しみもある。進では天國なども横はつて居る。之れ基督教の大なる特色で他に類例を見ない所である。吾等は又一方全身を神に捧げて神の救を求め御力を得て始めて美しく薫陶せられるといふ方に進み入らなければならぬ。之でもう澤山であらう。鎌倉大佛の顔とマドンナの顔とは大變に違つて居る。マドンナの祈り、讃美の顔に對して大佛の顔は些の表情を認め得ない。一は心を高きに馳せて心眼共に天空に向ひ父を呼び神を認めて居るが大佛には此の特點が現はされて居ない。之れ基教と佛教との特質を遺憾なく發揮して居るものではあるまいか。

彙報欄

●秋色動く

炎熱燃へむ緣りの畦路も、いつしか涼しき初秋の衣をつけて、尾花苅萱桔梗なんど、秋の七草今盛りなる姿の優に美しきかな。

故園の山河に樂しき二ヶ月餘の月日を送り給ひし諸姉は、幾多なつかしゆかしの思出と、新鋭潑溂の活氣とを以て、再びなれし學舍の一室、新らしき學期を迎へ玉ひしと信ず。氣は澄み心改まり、四圍の風物亦自ら變ず。燈火可親の時機は近づき、肥馬高天の小春日は眼前に迫れり。あゝ人改まり風物亦自も面目を新にす。本誌豈ぞ獨り改まらざるの理由あらむや。

●雜誌の革新

此に於て吾人は本誌革新の端緒として、先づ本號より雜誌體裁の上に些少の刷新を加へぬ。必しも之を革新とは云はず。然も之れ革新に入るの第一歩也。內容の改善、記事の撰錄其他百般の事項に至ては、號を追ひ月を重ねて漸次革新發展の實を揭げむとす。乞ふ注目して向後の本誌に見られよ。

○女子青年會第二寄宿舍を觀る

八月十五日、マクドナルド孃を青年會本部に訪れると、今日は丁度午後二時から第二寄宿舍に行く約束をして置たから是非一所にきてくれとのと、で早速同道を約して時餘の後舍監世良田氏と三人で本部の門を出た。

寄宿舍は鷹匠町の一隅綠陰風淸き臺地に建てられて居る。工事は既に八九分を終えて新築二階立の一棟巍然として、あたり一面を双眸の中に丸めて居る。世良田さんは自分の家であると云ふので、ミス、マクドナルドに勸められて手づから門を開き戶を開いて我等二人を客人あしらいにせられたのも一興であつた。さすが神の事業の一部として此に新らしい寄宿舍が開かれるといふのでマクドナルド幹事の喜悅は一通りや二通りではなかつた。本門の評などが盛で玄關へ上り食堂に入ると、まだ大工は盛に手入れをして居る。マクドナルド幹事は口早に「此處が食堂で三十五人位は入ります。次が臺所で貯室です………」と說明の勞をとられる。三人は今廊下を右に折れて　小奇麗な床の間の付いた六疊の一室に止まつた。新らしい疊の匂がプンとする。此處が世良田さんのお室ださうで此の寄宿舍の中心點である。が、少し小暗いやうであつたのは惜しいと思つた。東の端は廣い二個のルームで障子一ツで隔てられて居る。此處はスターデールームだとのこと、何れ朝夕の祈禱、娛樂、談話室などに兼用せられるゝことであらう。

二階へ上ると愈舍主の室になつて居る。すべてが七疊敷で押入口などは申分なく出來て居るが床の間のないのは、何よりも惜しいと思つた。室の數はすべてゞ十二三もあつたらうか、新築だけに何處をみても心持が可い。南の端には四間に三間位な物乾し臺が出來て居る。之は婦人の寄宿舍でなくては見られぬものだと笑ひ合つた。此處を凉臺に暫らく四邊を見渡してみると、クレメント氏の邸宅などが綠樹の間手にとるやうに見へて居る。丁度此の頃は男子の青年會で僅か早稻田と茗荷谷との二個だけしけやない寄宿舍が、經費の都合でヨリ多く歷史的な早稻田を離

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

すといふことになつて居たので、余は深く女子青年會の成功と發展とを祝して一種異樣の感に打たれてしまつた。

やがて晴れやかな空は俄に曇つて今にも雨になりさうである。て急ぎ暇を告げて此處を辭した。急雨一洗、篠突く雨の脚が切りに落ちてきたのでさあ大變、「白雨や法華(ほつけ)かけ込む辻の堂」をきめこんで手當りばつたりにかけ込むだのがさる奇麗なミルクホール。やあ嬉しいとミルクの數本をみるまに平げて、思はぬ腹鼓を打ち、さて持合のペンシル片手に走り書きしたのが此の一文。マクドナナルド幹事と固く約束をした申譯に一筆如件。(某ミルクホールに於て、一記者)

○工女傳道につきての所感

主にある姉妹方に我が働きの有樣を一言なりとも語る折を與へられたるは我が身にとりてのこよなき幸又一層の力を與へらるゝ事である。

私は今直接女子青年會のためには働て居りませんが、然し女子青年の爲めに働かん考て今紡績會社の女工に傳道を試みんとしつゝあります。皆樣も新聞紙や諸雜誌の上て現今如何に此諸會社の職工問題につき世人の頭を痛めつゝあるかは御存じて厶いましよう。

百聞は一見に若かずとかや、私は幼き時からかゝる事に心をよせて居りましてたま／＼新聞等か見まして幾分かの同情を拂つて居りましたが此度彼等女工に接し事實を見聞いたしまして云ふべからざるの感にうたれました。

此會社には現今三千二百人の職工が居ります彼等は一月に四回日夜交代て六時から六時までづゝ十二時間勞働するのてす。

一月の中交代日には四日の休業があるので其日は幾分の自由を與へらるゝとの事、又長年月務め信用さるゝ職工は外出さへもゆるさるゝのである。

彼等の外出は勿論肉體の快樂を求むるためてある、或時私は男工の歌をきゝました「會社の女工さんが人間なればチヨウチヨトンボも鳥の中」と味ふべき歌てはありませんか。これに由て彼等の有樣が想像されます。然し／＼彼等にも靈がある。そもかゝる憐れなる有樣になつたのは誰の罪てしようか、彼等の中多くは境遇によつてかゝる狀態になつたのてあろうと考へます、キリストの救の如何にも大なる事を深く悟りました。

會社の休日即ち交代日に工女のため聖書の講義を開き、幾分なりともキリストを紹介せんとしつゝあります、其他にも多くの途が開かれて居ります。同情を持たるゝ姉妹方、何卒此の働きのために祈り下さらんことを願います。(無名子)

○ウヰルミナ女學校青年會報告

敬愛する諸姉方には此酷暑の際も尙御恩惠の下につゝがなく御消光遊ばさるゝ御事と賀し奉り候さて當會に於ける六七兩月の摸樣左に少しく御報告申上ざ候六月三日午後には當時御在阪中なりし日本基督教導傳師木村淸松先生に依賴して講演會を開き申候同師ばえスの最後の二日間と題して最も適切にして有力なる講話を致され爲に同日一生を奉げてキリストに從はんと心を決する者九十有七名。同情に富める木村師は私共一同と喜を共にし日々の御疲勞をも忘れられ同月十一日午後再び來つて決心者一同に對し懇切なる話を致され申候、其後前後二回之等決心者のため特別祈禱會を開き毎週各級の祈禱會は例の如くに致し候。七月十日午後一時より當公堂に於いて第一學期間最終の祈禱會を開申候、青山教頭の勸あり又綾姉とて今年當校を卒業し海國中の一會員郷里に於いて非常

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の熱心を以て神の道のため力を盡して極かるゝ由聞きて會集一同深く神に感謝致し申候別るゝに及んて一同の上に神の御惠ゆたかならん事を祈り終りを遂げ申候

八月六日

ウヰルミナ女學校女子青年會書記

○名古屋女子青年會遊戯講習會記事

遊戯講習會は豫期の如く明治四十一年七月十三より同十七日迄五日の間毎日午後一時半より約三時間聖使女學院内に開會せり但し毎日講習後三十分を有志者に對する聖書講話に充てたり

講師として東京女學高等師範學校助教授今井タイチ先生を聘し小學校程度の講習あり講習科目左の如し

歩行種類＝二十五種　（通常歩。足踏。舉踵）應用運動＝四種　スケーチング燕、ベビーポルカ、マーチポカ、バスケットフヰキューア、白雲、キヤプテンボール＝三種　バスケットボール、田毎ノ月、三日城娘、レットボール、コントラダンス、懷シキ祖國、スペニッシニダンス、スタープライゲン、郭公、ドライタクト、名チボール

講習會員は三十七名なりき

聖書講話には廣島在住ノボサンケツ　先生に依頼せしに其快諾を得たるに依り先氏を聘し四日間左記の題目つき懇話を聽くを得たり

有益なる書物よりの助け即最大の書物、最良最善の友よりの助け即最上の友なる主キリスト、高き理想より受くる助け即理想的生涯逆境に於け惡即平安と勝利の道程

終りの一日は當青年會顧問にたる宇野牧師より「向上生涯に於ける自覺と云ふ題にて一條の訓話あり凡て感銘頗る多かりき

會員一同は肉と靈とに主の大なり恵を受け滿足と喜を以て散會せり

右講習會員にして當青年會に入會したるもの七名而して現在本會會員數六十二名（退會者は六名）なり

◉原稿募集!!

記者は本誌改革の一助として讀者諸子の手に成れる諸種の原稿を募集す。秋風颯々として轉た詩情の湧昇を感ずる折柄、七十餘日の夏休みは諸子を親しく自然崇美の理に導き、神の御聲に觸れしめしものと信ず。靜かに涼しき机邊おきあまる葉末の露に心情泌々の想を寫すも亦佳ならずや。小説美文和歌隨想錄何でも可也。吾人は十分なる責任と愼重の態度とを以て出來得る限り讀者諸子の厚意に背かざらむことを期す。

投稿者はすべて原稿用紙に字格明瞭たるべきこと。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

YOUNG WOMEN

OF

JAPAN

Vol. V. *September, 1908.* *No. 8.*

Miss M.A. Whitman, Chairman

Dr. Kei Okami, Vive-Chairman

Miss A.G. Lewis, Recording Secretary

Mrs. G.M. Fisher, Treasurer

Miss Michi Kawai, Active Member of the World's Committee

Miss Sumi Miyagawa, Corresponding Member of the World's Student Christian Federation

Resident Members	Non-Resident Memebers
Miss Ume Tsuda	Miss K. Tristram, Osaka
Mrs. Hatsu Watanabe	Miss Michi Matsuda Kyoto
Miss A. B. West	Mrs. G. S. Phelps, Kyoto
Dr. Tomo Inouye	Miss E. M. Soper, Nagoya
Miss Hama Hirano	Miss N. B. Gaines, Hiroshima
Mrs. Hana Ibuka	Miss L. Zurfluh, Sendai
Mrs. Koharu Nakajima	
Miss Uta Suzuki	

Miss A. Caroline Macdonald,
General Secretary

Miss Stella C. Fisher,
Assistant Secretary

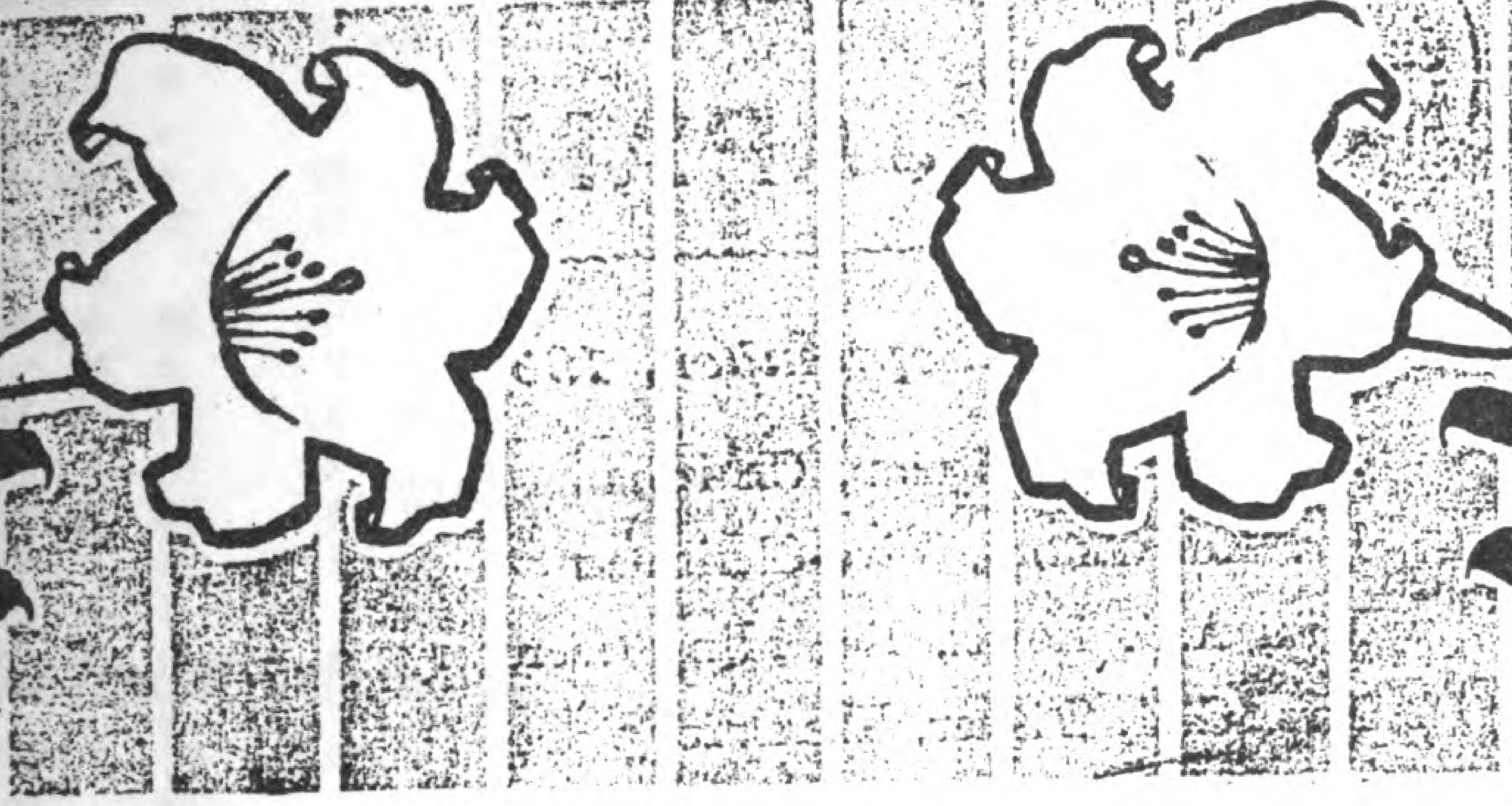
Headquarters :— 15 Dote Sanbancho, Kojimachi,
Tokyo

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

明治三十七年六月七日第三種郵便物認可

YOUNG WOMEN OF JAPAN



Vol. V. *September 1908.* *No. 8.*

CONTENTS

MAIN ARTICLES

The Christian Treatment of the Body....K. Ibuka
What it means to be a Christian..A, C. Macdonald
The Sinfulness of a light Attitude towards Sin................................K. Kawazoe
Reform in the Mode of Living......S. Miyagawa
Ibsen as a Poet..............................U. Akita
The Mystery of Night .... I. Kiyama
The Choice of a Religion ....M. Uemura

MISCELLANEOUS

The Coming of Autumn......A New Departure.... The Association Hostel at Nandomachi .... Mission Work among Factory Women......Association Reports......Editor's Notes.

東京神田美土代町三秀舎印行

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA